

# 松村通信第 1 5 5 号

12 月 15 日  
松村勝弘

## 島田克美先生（その 3）

今回は前々回、前回に引き続き、私淑していた島田先生のことを書きます。そのまえに若干の近況を書いておきたいと思います。

**近況** 前回書いたように、最近は自宅とオフィスを自転車で行き来する毎日である。そして校友会や同窓会、知り合いの皆さんとの一献が入ってくる。11 月 16 日は証券研究会 OB 会に参加。ご多分に漏れず、学術系サークルはコロナで現役新入生が入部できなかった影響で、現役学生がゼロとなり、現役学生の参加がないという残念な状況が続いている。OB だけだからサークルの再建が困難な状況である。終了後ゼミ卒業生らと、といっても私を含め 3 人だけだったが、古川町「万両」で 2 次会となった。いつも言うように、ここの女将はわがゼミ第 2 回卒業生なので、心置きなく飲めた。

ことほどさように、飲み会を楽しんでいる。もちろん、学会にも参加している。11 月 23 日には、日本財務管理学会の大会に参加したが、場所が八王子の中央大学であったため、前泊・後泊を強いられ、たった一日の学会のために二泊三日を強いられた。懇親会でも、最長老として乾杯の音頭を取らされた。快く引き受けたが。このところどこへ行っても、最長老の場合が多く、乾杯の音頭を取ることが増えてきた。ま、歳は争えませんがね。学会から帰京した翌日の 25 日には「つえ屋決算説明会」に参加し、懇親会にも参加した。まさに、連チャンだった。つえ屋さんとはひよんなことからつながっています。

島田先生の話に戻りたいと思う。今回は、『戦後史の経済 異論の現場』（創英社/三省堂書店、2014 年）を、先生の経歴と先生の考え方を中心に取り上げる。2014 年に出版されたということだから、先生 88 歳のときの著書となる。それと、最晩年 2021 年、先生 95 歳の時の著書『よみがえれ愛しの日々 ― 亡き妻の日記より ―』（学文社）についても、少し触れてみたい。この本の出版は 2024 年 1 月 98 歳で先生が亡くなる三年前ということになる。とにかく先生は健筆であったことを

思い出す。

**従属の影** 『戦後史の経済』で書かれていることを一言でいえばこうなる。

「前半は民主化政策の利益を吸収し、後に受け身の改革に追い込まれていく過程を戦後史とみなし、そこでの経済の動きに対して、私がどのように関わりを持ったか、ということ語るのが本書の狙いである。」（4 頁）

「序章 敗戦国日本の経済にみる解放と従属の影」において、戦後解放され、日本は高度成長をつづけたが、対米黒字が拡大するにつれて、アメリカは日本の産業政策・経済構造への批判を強めた。これへの日本の対応に島田先生は疑問を呈しておられる。すなわち、「その批判に対して、日本はしっかりと自主的に対応したとはいえない。それは、アメリカが日本に軍隊を置いて防衛に当たるという関係に加えて、戦後の経済思想あるいはイデオロギーの面で、常にアメリカの方が正しさを主張し、それをむげに否定できないという観念が日本に広がっていたからである。いわば思想的なアメリカ依存である。その由来を尋ねると、日本が長く欧米に追い付くことを国是にしてきたことが影響しているかもしれない。」（2-3 頁）

**公正取引委員会** 「第一章 ヤング・ブライト・ボーイズ」において、島田先生は戦後改革のまっただ中での省庁再編のなか「一九五〇年の二月末に公正取引委員会事務局経済部調査二課というところに移った。これはもともと経済に関心をもっていた自分にとっては、奇跡ともいえる不思議な因縁であった。」（42 頁）その後の調査マン人生のきっかけについて語っておられる。公取は戦後の経済民主化のなかで独占禁止政策を実行する省庁である。そういうさなかでの仕事であったので、先生は経済民主化を肯定的にとらえられただろうと思われる。そのことは「第二章 王者を専制君主にはしない カルテル容認の時流に抗して」において「鉄屑カルテルの調査で私は何を学んだのか。……一つ言えることとして、鉄屑カルテルというテーマを軸に、いろいろな利害が錯綜する状況を、法の定める枠組みの下ではあるが、徹底的に調べるとい

うことから、私は実に多くのことを学ぶことができた。」(83 頁)このような表現から、調査マンとして独禁政策にかかわって、ある種の生きがいを感じられたように思われる。

**金融取引表・経済白書** その後先生は、金融面についての仕事につかれることになる。「第三章 マネーフローの日米比較 金融の構造と機能の分析」を読めば、金融構造の分析にかかわられたことがわかる。今日の資金循環統計のきっかけともなる仕事をされた。すなわち「ともあれ私は、公取で主に産業面の調査を経験し、また少しは経済全体の動きについて勉強もしてはいたが、ほとんど素手で金融の世界を相手にすることにな」(104 頁)り、「ここでは、いろいろな前提を置いているが、経済の全体を、政府、日銀、金融機関、企業、家計というように部門別に分けて、それぞれの金融面の大きな動きの要因を当時の日本の状況に合わせて、つないでいくと、こういうことがいえるという見取り図を描き、同時に数字を突き合わせながら、時間を追って動く企業の投資と銀行からの借入のそれぞれの変化をみている。これは、その後に発表されるようになった『マネーフロー表』をみれば、その意味も限界もたちどころに分かるのだが、私がやったことは、いわばそういう分析に進むための過渡期の産物であった」(116 頁)といわれている。その頃なかったマネーフロー表を一からつくったと言われていたのを思い出す。

「第四章 設備投資の可否、計画の是非」では、「一九六二年に、私は総合計画局計画課の筆頭補佐への異動を発令された。これは、官庁としての経済企画庁にとって、ごく普通の人事異動で、いわば定石通りに将棋のコマを動かすような意味だったかもしれない。しかし私にとっては、二つの大きな意味があった。一つはやっと金融の専門家になれるかもしれないというところで、金融の仕事から引き離されるという理不尽な思いがあったことだ。ただし他方もう一つの側面として、向坂が計画局長になったということから、この人の下で仕事ができるということに、期待と喜びがあった。もっとも、局長と課長補佐の間には、参事官とか課長という上位者がいることから、課長補佐が局長と直結することは、組織論としては好ましくはない。ただ、それは建前上のことで、計画課といういわゆる局の総務課の筆頭課長補佐というのはそれなりに、局全体を仕切っていくことが期待されて

いる地位であるから、向坂の仕事を助ける立場にあった。」(162-163 頁)ここで、島田先生は向坂経済白書作成に携わられたわけである。

**ジェットロ出向から商社へ** 「第五章 リサーチ・バグ」で、島田先生はジェットロ(日本貿易振興機構)に出向して、ニューヨークでのお仕事に携わられている様々な経験をされたことが書かれている。「ニューヨークのジェットロで調査を担当した私は、現地で、リサーチ・バグ、調査の虫という有り難いあだ名をもらった。ただし、仕事の虫になりきったわけではなく、観光を通じてアメリカを知ることでも大きな楽しみだった。」(173 頁)この頃のことを、このように要約されている。ジェットロでの経験が住友商事に移られるきっかけになったのだろと思うられる。そして、「第六章

商社は悪か、スケープゴートか」において、住商での経験で感じたことなどが書かれている。「七〇年代の日本企業は、石油危機やインフレ傾向の中で、強欲、反社会的というイメージで批判されたりしたのだが、私の身の周りの経営者からは、そういう印象を受けなかった。」(217 頁)住商は戦後住友グループの商社として、しかも「浮利を追わず」という住友の精神にもかかわらず、旧住友本社から独立したといういきさつから、いわば異端児として発足したという経緯をもっているもので、三菱商事、三井物産、伊藤忠商事、丸紅という先行商社に追い付き、追い越すという立場にあったので、しかも社長室に勤務されたという経験から、かなり貴重な経験をされたと思われる。

以下のような叙述からもそれが窺われる。

「話は大阪勤務の頃に戻るが、その時代、もとの住友本社の本流を歩いてきた津田社長の直接の部下という立場に置かれたので、住友の歴史についていろいろ話を聞くことができた。同時に当時の住友銀行の戦略的な行動に対応していく住商の微妙な立場というものがわかった。それは戦後の旧財閥系企業のあり方を知る一つの手掛かりになった。」(244 頁)

**米国の対日要求への疑問** 住商退職後、京都学園大学、流通経済大学と、先生は 1986 年、大学教員の道へ転じられた。その中で感じられたことが「第七章 摩擦のシンボル取引慣行」「第八章 系列は死んだのか」で論じられている。ときあたかも日本がバブル最盛期からバブル崩壊への道を転げ落ちる時代であった。バブル最盛期、日米経済摩擦は燃えさ

かり、アメリカはついに日本の経済構造それ自体を問題にし始める。日本側も前川レポート、新前川レポートを出して対応したが、バブルはおさまらず、ついにアメリカは日米構造協議で日本に要求を突きつけてきた。その理論的背景にある、いわゆる「市場万能論」を問題にされる。公文俊平『市場原理万能論』には大きな疑問」(『日本経済新聞』1981年8月30日号所収)に依拠しつつ、論じられる。

「彼が批判の対象としたのは『市場原理は「普遍的原理」だ』という命題そのものである。さらにそれを日本の現実に適用して説明するときの論理の恣意性も問題にする。そのことから、『日本特殊性論』がともすれば知的怠慢に陥る危険をはらんでいるならば、『市場普遍論』には知的偽善に流れる恐れはないか』と言っている。つまり、特殊性にこだわる立場では、日本経済の良いところはすべて特殊性によるといって終わるのに対して、日本経済の発展要因を市場原理で説明するときには、そういう立場からみて望ましいと思う要因をつまみだして、これがあつたから日本経済は発展したという、いずれも問題である。

その後の推移は公文が心配したような方向で市場原理を振りかざす方向に行った。そして市場原理という『普遍的善』に、より近づくという論理で『改革』が進められ、『市場原理は普遍的な善である』との前提を疑うことを許さない構えになっていったから、改革には多大の偽善が含まれることになった。」(268頁)

**対日要求の身勝手さ** 日本の対米黒字、アメリカの対米赤字がそれをもたらしたのであつたが、島田先生は自著『国際経済と日本』(学文社、1984年)の主張を紹介しつつ、アメリカの際限ない赤字の原因をこう論じられている。

「この本の主張は、経常収支の均衡、黒字化を肯定的にとらえる立場である。それは戦後のガット・IMF体制の考え方を尊重するものだ。すなわち、自由貿易を基本に各国が自国の経済運営に責任をもち、一時的な赤字国には国際的な支援をするが、それが長く続くことがないように、赤字国は経済調整を義務付けられるのである。このルールは、多くの途上国に対して適用されてきたが、自国の経常収支が赤字であるのに、そのような調整を免れたのがアメリカであつた。アメリカは、自国通貨のドルを国際通貨としていくらでも

使うことができるからである。」(289頁)

先生はアメリカの対日要求の身勝手さを一貫して主張されている。香西 泰と共同で監修された『ディレギュレーション下の産業と金融』(東洋経済新報社、1987年)所収の「国際経済政策」と「日本の経済システム」の章においてこのようにいったと言われている。

「企業間結合の問題に関して私は、そこでも言っているように、外国企業が提携とか同盟とかいうかたちで相互のつながりを強める動きをしているときに、日本企業が相互のつながりをあえて断ち切っていればハダカにさせられかねないようなイデオロギーに大きな矛盾を感じていた。実は、多国籍化した企業の論理は、もはや一国の利益といった議論を吹き飛ばしている。そのことが企業の自由とかたちでのディレギュレーション要求をグローバルに広める機動力になっているのだろう。ところが自由の中で企業側は結合形態を選べるというのに、なぜ日本企業の結合が改革をせまられるのか、そこに虚偽があるはずなのだ。ともあれ、このとき、一時的にせよ私がディレギュレーションの主張をする側の人たちの中に居たことは、一つの記念として記録しておく。ただし、私は、構造調整を簡単にできるとは思っていなかった。それは単に守旧派、あるいは既得権の力が強く改革ができないということではない。社会の利害、歴史の経緯などを無視してはならないからだ。」(313頁)

そして第八章で結論されている。すなわち「バブル崩壊後の不況の中で、構造改革論が支配した。改革論は市場原理の徹底という理念を武器に、政府規制の緩和や日本の企業システム改革の猛威をふるった。ケイレツも断罪された。ケイレツ崩しは、金融再編などを生んだものの、日本経済を強くはしなかった。」(315頁)私もまったく同感である。

**愛妻家** では次に『よみがえれ愛しの日々——亡き妻の日記より——』を簡単に紹介したいと思う。この本は奥様敦子(のぶこ)様の日記を再構成したものである。その章編成は下記の通りである。これで全貌はおわかりと思う。

第一章生い立ちと新婚生活

第二章異例のチャンスで東京へ戻り、住居は  
転々

第三章アメリカの三年

第四章帰国し住友商事大阪勤務となる

第五章東京に戻り社宅に住む

第六章五〇歳代、人生最盛期、後半へのスタート

第七章克美、大学教員となり勤め切り、外房に別荘をもつ

第八章高齢期を生き、努め、楽しむ

第九章要介護から、やがて病床へ。克美は肺炎から生き延びる

とても紹介しきれないが、興味深い点だけを紹介したいと思う。奥様は丁寧に日記をつけておられたので、それに先生による若干の補足を加えて、奥様の全生涯を紹介されている。

**日記** 「はしがき」でその日記の特徴が書かれている。「日記は膨大で、その中からの選択が必要になる。勝手に事実の味付けをして編集すると、本人の意思とちがう結果になりかねない。しかしそういう悩みを持つ必要はなかった。それは、敦子の日記そのものが、事象の観察記録と、自分の感情表出との適度なバランスを示していたからである。」(i 頁)まさに、先生は愛情を持って紹介されている。それはまた本文全 360 頁という大部となっている。とても全部は紹介し切れなことをお断りしておく。まさに良妻賢母であったことが窺われる。

奥様は 2019 年 1 月に亡くなり、先生は日記を読んで出版しようと 2 年間格闘され、2021 年 1 月に出来上がり、3 月 1 日に発行されている。私との往復書簡のなかから拝察すると、とりわけ 2020 年後半に集中的に執筆されたようである。

日記をもとに書かれているので細かく書いてあったことが分かる。新婚当初の 1954 年頃の物価、うどん 8 円、卵 1 個 15 円、豆腐 1 丁 15 円などとある。当時は卵が高かったことが分かる。『真実一路』、大佛次郎『宗方姉妹』を読んだなどとある。奥様は読書家だったようである。結核を患った経験もあり、体調に不安もあったようである。1955 年には先生の転勤で、名古屋へ転居されている。名古屋でも肺結核が再発したが化学療法で快方に向かったようである。「幸福感が名古屋生活の記録」(23 頁)と記されている。そして経済審議庁への出向命令を受けて 1957 年には東京へ戻られている。その後 1961 年妊娠 1962 年出産と続く。

**転勤に伴う転居** その後先生のジェットロ出向のため、1964 年 2 月から三年余りアメリカニューヨークで暮らされた。奥様は夫婦で全米各地への旅行をされるなど全米生活を満喫

されている。さらに 1967 年に先生が大阪にある住友商事本社社長室に移られたことに伴って、大阪で生活されることになる。大阪茨木の社宅で 3 年間暮らされた。しかも先生の地位上昇に伴い、東京支社の調査課の課長兼務で出張が増えるなど、先生の仕事は多忙を極めている。しかしその間でも「観光意欲はかなり強かった」(105 頁)ので、夫婦で天橋立をはじめ、関西地区の旅行をされている。1969 年には千里に物件を購入されたが、先生の社長室長としての仕事で東京へ転居され、「千里での生活は実質半年で終わった」(110 頁)という。かくて「東京に戻り社宅に住む」(113 頁)ことになったという。1976 年には梅丘の自宅を新築され、以後そこに住まれることになる。

**大学教員の妻として** 1986 年住商を定年退職後、京都学園大学に勤め、京都住まいをされ、その間奥様と嵯峨野など京都各地を回ったりされている。1989 年には流通経済大学へ移られている。その間、外房和田などに別荘を買われ、奥様も別荘住まいを楽しまれている。また、先生からも聞いたが、先生の原稿を奥様がワープロで清書されている。奥様は和田の別荘で流星観測を楽しまれてもいる。また小諸の別荘も楽しまれている。

**晩年** 1999 年に先生は大学を退職され、以後は奥様は孫の誕生、成長を楽しまれている。またこの頃に奥様はピアノを習われている。また、2008 年には上高地への旅行を楽しまれている。2010 年には奥様 80 歳ながら、近県への旅行を楽しまれている。佐久の別荘にも行かれている。その後も先生との旅行を楽しまれている様子が書かれている。「転機となった二〇一四年」(278 頁)とあるように、奥様の体力低下が問題となる。「介護を受けつつ病院通い」(282 頁)をされている。「二〇一五年前半、敦子の足が弱り、訪問看護のリハビリへ」(283 頁)となった。「二〇一六年、近所を二人で行動」(287 頁)される日々であったようだ。2017 年、18 年と徐々に体力が低下していったようである。そして 2019 年 1 月 6 日に 88 歳で亡くなった。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。  
皆様のご意見を歓迎します。HP  
(<http://www.ritsumeai.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。  
フェイスブックもやっています。また、メールで意見  
交換しましょう。メールをよこして下さい  
([matumura@mba.ritsumeai.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumeai.ac.jp))。